



TITLE:

錢大昕の考據學としての「史學」 について

AUTHOR(S):

濱口, 富士雄

CITATION:

濱口, 富士雄. 錢大昕の考據學としての「史學」について. 東洋史研究
1989, 48(3): 509-527

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154294>

RIGHT:

錢大昕の考據學としての「史學」について

濱口 富士雄

一

杜維運は、「十八世紀の中國の史學は、錢大昕の時代であつたといつても不都合はない」とまでいう。これは、錢大昕（竹汀、一七二八—一八〇四）の史學の、實證主義や博學にもとづく客觀的な方法論が、近代史學の精神に通じるとの判斷による。

清末の朱一新は、考據學が最盛を迎えた時期の典型として、經學では王氏父子、史學では錢氏兄弟を擧げ「竹汀の史學ははなはだ精確で、もしたまたま誤りがあつたとしても、王鳴盛などに較べればるかに勝つてゐる。ただこれは史料解釋の基礎であつて、歴史研究の典型は、これに盡きるわけではない（第此爲讀史之始事、史之大端、不盡於此也）」と指摘し、まさに錢大昕の史學のありかたが考據學的な史料批判と解釋——讀史——が中心であり、歴史研究の典型——史之大端——そのものとは異なるものであるといい、かれの考據學としての史學の本質をうがつものがある。さらに梁啓超は「乾嘉以來、考證學が學界を統一すると、その大きなうねりは、いきおいとして史學にも及ばざるをえなかつた。すなわち趙翼の『二十二史劄記』、王鳴盛の『十七史商榷』、錢大昕の『二十二史考異』、洪頤煊の『諸史考異』などは、みなその流れを汲んでいる。……これらは、いずれも經學における考證方法を史學研究に移行させたもので、考證學とはいえても、ほとんど史學とはいえない」といい、乾嘉期の考據學の充實は、經學領域から史學領域への波及となつたとして、經學におい

て形成された文獻解釋の方法論をそのまま史學文獻の考證に應用したことの事情を端的に説明した。しかも注目に値する點は、朱一新と同じく、それがいわゆる史實にたいする議論や政治・制度・事件についての分析など、いわゆる問題意識にもとづく史論が稀薄で、史料批判と解釋、つまり考證學にとどまっているとの指摘である。

すなわち、こうした乾嘉期の考據學的土壤のなから、史學研究への機運が生れ、王鳴盛、趙翼らの清代實證史學の隆盛をものがたる史學研究がでた。この動向の推進役を果たしたのが錢大昕であり、かれは經學の領域で十分に完成された實事求是にもとづく合理的・實證的な學問姿勢とともに、音韻・訓詁・文字學に基礎づけられた考據學の方法論を史學の解釋學として應用したのであり、「經學の考據から史學の考據への移行では、錢大昕の役割はもっとも大きく、考證はもっとも精確で、その影響ももっとも深い⁽⁴⁾」といわれる。その史學的考據を「史學」と見做すか、保留をつけるかの解釋に相違はあるが、考據方法を史學領域に移行させた、錢大昕の役割については異論はない。

ここで、經學研究において形成された考據學の方法論は、果たして單純に史學に適用できるほど客觀化し形式化した手續きとなっていたのか、まずその内容が確認されなければならない。また、錢大昕がいかに整合的にその考據學をみずからの史學の方法論にしたかが検討されなければならない。

二

錢大昕は、經書解釋の基本をなす考え方を「經學を研究するものは、必ず訓詁に通曉しなければならず、訓詁が明らかになつてはじめて義理の眞實が理解される（夫窮經者、必通訓詁、訓詁明而後知義理之趣⁽⁵⁾）」と表現する。これは戴震の「文字から言語に通じ、言語から古聖賢の心志に通じる」（古經解詁沈序）や王念孫の「訓詁・音韻が明らかになってから小學が明らかとなり、小學が明らかになってから經學が明らかとなる」（說文解字注序）という言説と同じであり、清朝の學者たちが共有していた考據理念そのものである。そこでこうした理念に導かれた、その考據がいかなる内容をもつかを確

認しておく。

わが王朝の通儒、顧亭林（炎武）・陳見桃（啓源）・閻百詩（若璣）・惠天牧（士奇）らが、はじめて篤く古學に志して、經書の訓詁を深く研究し、文字・音韻・訓詁から義理の眞實を把握することになった（由文字聲音訓詁 而得義理之眞）。

……六經は、聖人の言葉である。その言葉によってその義理を追求するばあいには、訓詁からはじめなければならぬ（因其言以求其義、則必自詁訓始）。訓詁を超越して、別に義理があるというのは、佛教において不立文字を最上乘とするものと同じで、わが儒家の學問ではない。訓詁は必ず漢儒に依存するのは、それが古から隔たっておらず、家法としての傳承があるので、孔門七十子の大義において、依然として残されているものがあるからである（詁訓必依漢儒、以其去古未遠、家法相承、七十子之大義、猶有存者）。……三代以前、文字・音韻は、訓詁と相關性があつたことを、漢儒はなお承知しえていたのである。古を尊重するというのは、その眞實を尊重することにつぎるのである（以古爲師、師其是而已矣）⁽⁶⁾。

ここで錢大昕は、清朝の考據學の展開過程を概観し、その特質を浮きあがらせる。考據學の基本的姿勢として、まず注目すべき點は、儒學においてはその「義理」が訓詁を超越するものではないと言明した點である。これは、宋・明學克服の措置でもある。圖式的に言えば、宋明理學にたいする批判は、かれらが儒學でありながら經書の記述そのものから超越した思辯を弄んだため、儒學の本來の姿から逸脱したところにあつた。その反省から、經書の言語表現そのものに沈潜する方向を確認し、「義理」＝儒學の道が、訓詁を超越しては存在しえないとし、それを追求するには經書の言語の解釋を通じること以外はないとする。これは、經驗的論證を寄せつけない超越的な思辯を排斥し、ひたすら言語という間主觀的に妥當性を有する手段に依存することである。言語は、自己も他者も共通して理解可能な客觀的媒介であるから、經書の言語表現にのみ即してその意味内容を限定してゆくことこそが、經書解釋を超越的なものに押しやることからの回避となり、その實證性も維持されることになるのである。錢大昕が訓詁にのみ、「義理」の存在を限定し、そこに經學研

究の場を設定した理由は、儒學を超脱するような宋・明學の觀念論を克服するための實證的な方法論の獲得にあったのである。その考據理念の總括において特に注目しなければならないところは、一つには、漢儒の訓詁は古代の傳承という歴史性に價值があるとする、古訓尊重の吳派的な要素、もう一つには、文字・音韻・訓詁の言語學上の原理を基礎とし、經書の眞意を言語學的な分析を通して合法則的に解明する皖派的要素を兼ね備えていることである。吳派のごとく「古」に無條件に従うというわけではなく、古を尊重するのは、まさに傳統・傳承として繼承されている古代的事實あるいは儒學的眞實を尊重するのであり、「以古爲師、師其是而已矣⁽⁸⁾」という主張にも決して教條的に漢儒の訓詁を偏重するのではないことが窺われる。「古（＝傳統）」それ自體が無條件で「是」すなわち儒學的眞實となるのではなく、合理的判斷が、そして客觀的な實證の手續きが、すべての權威の根據とならなければならない。この理性の審問は、先入觀や傳承の權威からの自由を意味するが、傳承それ自體の否定ではない。なぜなら經書の權威はそれ自體が儒學的傳承を内在させることであるからである。すなわち、傳承の超越ではなく、正しい判斷基準の確立により、正當な傳承の姿の追求を方法的に確立し、合理的判斷に準據させることである。

漢儒の訓詁の尊重については、「漢代の經師においては、その訓詁にみな家法があり、聖人から隔たっていないのである（⁽⁹⁾其去聖人未遠）」ともいう。ここでは「古」を「聖人」に交替させていることからわかるように、「古＝聖人」という強い儒學意識が解釋の支えとなっている。聖人に由來する傳統に權威を置くことは合理的な判斷を後退させることであり、實證主義の形骸化のように見受けられるが、この傳承受け入れは、言語學レベルからの批判をへたものである。したがって錢大昕は無條件に傳統に固執するわけではなく、常に漢儒の訓詁に關して十分な檢證をしかつ批判的に扱うのである。すなわち古代漢語では、文字・音韻と訓詁とが體系的な關連性を有しているという言語學的な認識のもとに、古音の追求は本文批判の基礎であり、訓詁は經義解明の基礎とする。すなわち「六經はすべて文字によって記錄されている。したがって音韻によらなければ、經書の文字は正されないし、訓詁によらなければ經書の義理は明らかにならない（六經

皆載於文字者也。非聲音則經之文不正、非訓詁則經之義不明。……文字によって古音を理解し、古音によって古訓を了解する。

これが文字・音韻・訓詁の相關性である（因文字而得古音、因古音而得古訓。此「貫三之道」⁽¹⁰⁾）。ところで現代の言語學でも、音韻論は「科學」的な分析たりうるが、意味論はやや扱いが異なる。音聲と意味との有契性はないので、意味論の研究は特

定の言語文化圏の歴史的文化現象や傳統とは切り離せないが、ある文化に定着した言語にあっては、音聲と意味との有契性は認められるとされる。こうしたことから錢大昕の漢儒の訓詁の尊重は、意味論の見地からは適切であり、有効な措置といえるのである。また古音研究について「文字・音韻によって訓詁を究明してゆけば、古義の復興は閒近である。どうして古音を殘續させることだけにおわるうか」とい⁽¹¹⁾、それを古義解明に從屬させる。漢儒がその言語學的事實に即した見識による注釋をするかぎりにおいて實證的に批判しつつ受け入れようとするのである。つまり言語學にもとづく解釋は、文獻にたいする外在的あるいは超越的ないかなる權威をも無力化し排除する方向で營まれる。すなわち文獻を、客觀的で檢證可能であり、しかもすべての人に共通の了解手續き、つまり徹底した言語化の方向で解釋することである。ここに至り傳承を內在させる文獻を批判的に理解する道が開かれる。

したがって古音は、本文批判の大前提であると同時に、古訓解明の根據となるものとして錢大昕の重要な研究課題となっていたのである。音韻論に關しての考察をこころみる。

錢大昕の研究は特異で、ほかの學者が古音分部の研究をおこなったのにたいして、ひたすら聲紐研究にうち込み、『十駕齋養新錄』に詳細な文獻的證據を擧げて歸納した結論を示している。そして古漢語には輕唇音がなく、重唇音だけあり、舌上音はなく、舌頭音に統一されていたという古聲母に關する見解は、今日でもほとんど修正されることなく受け入れられている。

戴震は、聲紐・反切の理論として字母の學の起點を從來西域や梵僧とされてきたことを否定して、漢末・魏の孫炎に起源することを史實として文獻的に確かめる⁽¹²⁾。これにもとづいて佛教側によってその成果が盜られ、逆に西域に由來するも

のといわれるようになってしまったとする。錢大昕は、このナシヨナリズムに根ざす超歴史的な認識をさらに敷衍する。經書である『詩經』にみえる雙聲が、聲紐理論の起源であることを論じて、聲紐に關する古漢語の理論を、儒學的價值觀のなかに取り込むことに腐心したのである。⁽¹³⁾

そこで『詩經』に古代漢語の音韻論の理論的根據を求めた。その理由は「ただ三百五篇の音を最善とする」⁽¹⁴⁾の發言に見られる。これは取りもなおさず、かれらの認識にあつては、孔子手定の經書である『詩經』の言葉に依據して古代言語の原理を確認することで、その儒學的價值が見出されるからである。そして『詩經』のなかの雙聲が、聲紐理論の原形であることを主張する。しかもこれが中國固有の聲紐の認識であることを斷言し、梵學に由來しないことを強く主張することで、その儒學的價值を確定しようとした。すなわち「雙聲を認識し、それからはじめて反切を作ることができるのである。孫叔然（炎）がその先覺者である。叔然・鄭康成（玄）らは、漢・魏の儒家であり、佛教關係の書物は讀んだことがないのであるから、音韻の學は梵學に由來するということが、どうして正しかろう」⁽¹⁵⁾という。

また錢大昕は、雙聲が『詩經』の修辭に起源することについて、つぎのようにいう。

人は形體をもつとただちに聲をもった。聲音が文字の前にあつて、文字は必ず聲音を利用して成立したのである。その要點をくれば、疊韻・雙聲の二端にすぎないが、疊韻はさとりやすく、雙聲はわかりにくい。……『詩經』三百篇が成立してから、この原理がおおいに明らかになった（至詩三百篇興、而斯祕大啓）。……どうして古代の聖賢の叡智が、梵僧の下に出ることがあろうか。四聲は六朝で發見されたが、古人が疊韻を知らなかったといえないし、字母は唐末に出現したが、古人が雙聲を知らなかったといえないのである。三百篇から雙聲の原理が明らかにされたのである。……雙聲は前にあり、字母は後にあったのであるから、雙聲を理解すれば、字母をいわなくても、それはよいが、字母をいって雙聲を理解しないのでは、濟まされない。すなわち雙聲は、とくに三百篇に起源していたのである。そこでわたしは六經の道は、なにからなまでにすべてにわたって備えており、後人のおしゃべり程度の知識で

は、もはや聖賢の範圍を乗り越えることはできないことを知ったのである（吾於是知六經之道、大小悉備、後人詹詹之智、早不出聖賢範圍之外也）⁽¹⁶⁾。

すなわち字母の出現以前に雙聲についての認識が確立していたことは、『詩經』の措辭において確認される。それは、實質的には字母による聲母の認識を先取りするもので、雙聲現象は『詩經』に一般的であるから、『詩經』は古音分部の解明の根源であるのみならず、聲紐についてもあらかじめ敎智として示されていたとする。つまり經書に包攝される道は、後人の言語現象についてのいかなる知識をも凌駕するもので、そのすべてがあらかじめ含意されているとする。言語の形而上化である。ここではもちろん後人による言語學的認識は、すべて經書にあらかじめ布置されていた事柄の發見にしかすぎないことをいう。したがって、實證的な現代言語學的な研究視角からすれば、非合理的ともいべき姿勢であるわけであり、王力は、錢大昕が三百篇を最善とするのは、歷史主義を缺乏させた尙古の態度で、小學を經學に奉仕させるものであると批判する⁽¹⁷⁾。しかしながらここでは認識の轉換をはかり、錢大昕の思考の文脈にそって理解してゆくことが必要であろう。錢大昕がその言語學的研究を展開した第一義的な目的は、あくまでもかれが生きた清朝という儒學の價值觀念が支配した生活空間のなかで、儒學文獻および儒學と不可分のものと見做した史學文獻の整理であった。現代の言語學的レベルから顧みて、その限界を批判することは容易であるが、まさにその時代における文脈のなかでの役割や意味を考へることにおいて、その意味が理解されよう。したがって、この戴震を超える聲紐の確定は、儒學的枠組みのなかにあっては飛躍的な發展であったと解釋しなければならない。すなわち、聲紐にたいする儒學形而上學からの根據づけであった。そしてこうした音韻論における儒家的形而上學の確立、つまり音韻論への儒學の意味付與が積極的に音韻論の研究を推進させるための重要な契機となっていたのであり、形而上學が考據學の基盤として存在したからこそ、その實證的研究を導き、考據學を支えることができたという逆説的なしくみが、そこにはあったのである。まさに錢大昕の方法論は、その儒學形而上學と不可分にかかわっていたのである。

三

『二十二史考異』序文に見えるように、考據の目的は二十二史が「文字は雜然としておびただしく、記述の原則は入り亂れている（文字煩多、義例紛糾）。地理については、古今で地名を異にし、位置も變化しており、官職については、王朝ごとに變更があり、格付けは時を追って變わる」状態であるため、實事求是の立場から、條理の貫通を求めることにあったという。しかしここでは、正史の文字および義例が正すべきものの第一に意識されていたといえよう。ここに、小學を基礎とした考據の史學文獻への應用の可能性があった。『二十二史考異』での考據の具體例を見る。

「牛」は、「冒（おかす）」である。

牛は、牙音の收聲で、冒は、唇音の收聲である。聲紐が同類ではないのにそれぞれに訓釋しあうのは、同位であるからである。古人は「反側」を「輓轉」と對にし、「顛沛」を「造次」と、

「元首」を「股肱」と對にしている。反側・顛沛は同じく出聲であり、元首は同じく收聲であるから、また雙聲なのである。經典に證例を求めれば、「多」を「祇（ただ）」と訓じ、「鈞」を「等（ひとしい）」と訓じ、……などみな諸聲の關係から意味を取っている。「牛」が「冒」と訓釋されるのも、またこの例なのである。⁽¹⁸⁾

はじめに錢大昕は、訓詁の本質を、雙聲關係にある語による解釋にあるとし、その雙聲關係を戴震の「轉語」の構想に依據して、つぎのように規定した。すなわち、いわゆる發音方法と喉・舌・齒・唇・牙などの發音部位が同じ子音どうしの「同位」と、發音部位は異なるけれども發音方法が同じ子音どうしの「同位相近」とである。⁽¹⁹⁾ところで反・側は今日、雙聲とはとうていいえないが、錢大昕は、それらが雙聲である輓轉と併せ用いられることから、本來は雙聲の語であるはずであるとの假説を立てて分析し、反（唇音幫母、塞聲不送氣音）・側（齒音莊母、塞擦聲不送氣音）いずれもが、古漢語では、唇音・齒音と發音部位は異なるが、發音方法の同じ「出聲（||不送氣）」で、⁽²⁰⁾同位相近の聲紐であることから、古音では轉用しうる雙聲の範疇に屬すと判斷する。したがって牙音・唇音という發音部位の違いはあるが、いずれも發音方法が收聲

であり、いわゆる「同位相近」の語どうしは、經書類にも多くの事例があり、たがいに訓釋しあえる訓詁學上の關係をもつことを、經書に見える多くの證例に確認したうえで、「牛」（疑母、鼻聲）を「冒」（明母、鼻聲）と訓ずる訓釋は、古漢語の訓詁としては合理性をもつことを確認する。

この考據は、古音の運用による漢代訓詁についての言語學的な分析であり、しかも多くの事例から歸納した實證的考據であつて、典型的な客觀的考據となつていよう。しかしながら錢大昕にとっては、儒學の價值觀の枠組みのなかでの解明なのである。すなわち、經書の訓詁そのものが、儒學的眞實に連續すると認識する錢大昕にあつては、一字一句の「是」の確定がすべて聖賢の叡智の範圍内にあるのであつた。これはかれの古漢語における聖人の關與についての認識や儒學の道は訓詁を離れては存在しないという基本的な理解を確認すれば明らかなことであらう。

ところで、本田濟「讀『潛研堂文集』」では、このように完全に言語理論の操作による實證的な考據と、錢大昕の儒學意識の強さとの内的關連を把握しえないまま、とまどい氣味に「訓詁學に政治的倫理的な價值があると主張したがるのである（文集二五、世緯序など）。従つて、彼の言語學的な知識が結果的に西洋の學問の成果と一致する點が多いにしても、彼の學が純粹に、近代の科學的精神から出ている、とするには躊躇せざるを得ない。彼の史學にしても、『廿二史考異』に見られるように、精密な文獻學的校訂が主となつているが、彼の意識の底には多分に『資治通鑑』（政治に資する歴史の鏡）的な、時としては『通鑑綱目』（倫理による歴史の評價）的なものが残つていて、科學的とのみ言い切れぬところがある」、また「本當の科學的な史學が、史實に對して倫理的價值判斷を下してならないものであるならば、彼の史學も、その細部の操作の科學性にもかかわらず、根本精神においてなお非科學的なところがあると言わねばならない」という。⁽²¹⁾この指摘は、言語學知識や考據の運用が科學的であるからには、その精神が科學的なものでなければならぬとする見解にもとづいている。しかし、錢大昕のばあい、その儒學意識の非科學性のために、この論理が當てはまらないので、その考據そのものの科學性についても保留せざるをえなかつたのである。しかしこうした理解のしかたは、儒學と方法論としての考據

とを分離し、それらが内的な關連性をもつことに氣づいていないものである。清代考據學においてはそれらが相即不離のかたちで展開してきたというその實像に迫ることなく、みずからの「科學」概念をもって考據學に強いているように思われる。すなわちみずからの概念操作の歸結として作り上げた、考證操作Ⅱ科學的／儒學意識Ⅱ非科學的とする考據學の形象において、はじめて發見したと思つた錢大昕の考據についての理解は、實は自分であらかじめそこに置いておいたものにすぎなかったということではなかったのか。ところでまったく視點を異にするものであるが、宋學派の方東樹は、『二十二史考異』について「探求是こまごましく、博學で惑わして名聲を求めるにすぎず、政治上の有益性や社會的な有用性においては、該當するものがない（不過探覓細碎眩博以邀名而已、於資治致用無當也）」⁽²²⁾と批判したが、これはその考據が儒學と不可分であつた本質的側面を見ていない點で、「科學」をもつて對應する立場と共通する。

「牛Ⅱ冒」の解明に象徴される錢大昕の考據の大部分は、確かに言語學的な論理操作と實證的な考據に盡きるようにみえる。しかしこれについては、いわゆる水邊で沐浴する人の動作をいかに詳細に記述したとしても、その人の生活の脈絡を無視するならば、それが單なる水浴びかなんらかの宗教的行爲かは判別できないように、個々の考據のかたちを見るだけでは十分とはいえず、考據の背後にまで回り込んで、錢大昕の儒學的脈絡において、それが單なる實證性を滿たすための考據であつたか、なんらかの附加的價值を擔つた考據であつたかを見極める必要がある。

四

以上、儒學的價值觀とは接點がないように思われる小學にもそれが刷り込まれており、それを基礎とした考據が、すでに儒學的意義づけのもとに運用されており、『二十二史考異』の考據に儒學的內實があることを見たが、ついで史學についての錢大昕の見解を考察する。江藩は、それを裏づけるべき錢大昕の發言を「惠棟・戴震の學が、世の中に流行してから、天下の學者は、ただ古經を研究し、ざっと三史（史記・漢書・後漢書）に目を通すだけで、三史以下については、あい

まいなまま知識がない。これを通儒といふことができようか⁽²³⁾と記録する。これを承けて江藩も「著したところの『二史考異』は、要するにある意圖をこめて著作したのである(蓋有爲而作也)」と評している。すなわちかれの史學的考據の典型とされる『二十二史考異』は史學的な校訂の正確さの追求に意味があるだけではなく、江藩の理解に従えば乾嘉の經學、これは吳派・皖派兩派をも含む考據學が、經學に片寄り、史學に無理解であることへの批判が存しているのである。錢大昕の史學研究には經學的な理念が込められている。「通儒」の概念は、單純に儒學の範疇にのみ限定されず、學者一般として博學を身につける意味も多分に含むであろうが、「通儒」の語により、歴史に通曉することをも規定するのは、まさにこうした認識が根柢にあったからである。そして江藩いうところの「蓋有爲而作也」は、この間の事情を含むものといえよう。また「通儒」について「通儒の學は、必ず實事求是から始まる」⁽²⁴⁾ともいうように、それは、かれの基本的理念である實事求是と不可分の關係にある。これは『二十二史考異』著作の意圖を、通儒の實現に置くとともに、その自序に「實事求是」を掲げていることから了解される。このように實事求是もすでに儒學的コンテキストのなかに位置づけられていたのである。ところで歴史記述について、それが歴史家の現代の關心にもとづいて書かれ、しかもある觀點からの論理構成によるものであるという理解は、すでに一般的になってきているといえよう。これは當然のことながら、錢大昕の史學も、清代乾嘉期におけるかれ自身の「現代の關心」——儒學の枠組みに拘束されているという理解を導く。そして、その考據や言説は、かれみずからの儒學的コンテキストのなかにすべてが嵌めこまれていたとみななければならぬ。たとえば、錢大昕の實證的な史學觀を端的に示すものとして「史家の事件の記録は、ただ美をつくりあげず、惡をかくさないことにある。事件にそのまま従つて直書すれば、是非はおのずから現れる(據事直書、是非自見)⁽²⁶⁾」とある。これなどは、今日の史料主義の根柢にある素朴實證主義に共感される、まったく一般性をもった發言のように思われる。しかしそれは、錢大昕がみずから意識しえなかつたか別として、儒學的價值觀の網目のなかにおいてすでにある色づけが施されたうえで發言であり、まったくの白紙狀態のものとはいえないのである。したがって、その直書も、そしてその直書

によって事實のなかからおのずから現れてくる是非も、また實事求是も、すでに儒學的なベクトルを潜在させていることを理解する必要がある。

さらに經學と史學との關係については、錢大昕には、經史不可分論とでもいうべきものがある。それは趙翼『二十二史劄記』への序文⁽²⁷⁾にみえる。趙翼は、經學を研究するほどの資質はないが、史書は「事柄ははつきりし、理念もわかりやすい（事顯而義淺）」ので、研究することにしたと述懐した。錢大昕は一應これを趙翼の謙遜とかわしはするが、これは、趙翼の史學認識の淺薄さの表明だけにとどまらず、實質的には錢大昕の史學理念に對立する。したがって、その反駁として、「經學と史學とは、どうして區分された學問であらうか（經與史、豈有二學哉）。……もともと經學と史學との區別はなかったのである（初無經史之別）」という。これは、錢大昕が經史を二分しないことの宣言である。この錢大昕の經史不可分論は、ただ經學的な視點を史學に應用するといったものではなく、史學の經學化、すなわち史學と經學とを同等の論理において認識することである。よって錢大昕の史學的考據は、經學で形成された考據方法の史學への移行という程度以上に、史書における儒學的な價值觀の追求として適用されたといえよう。

また『漢書』の「古今人表」について、「この表は長いあいだ後世の人々から非難されてきた。わたしはただそれが儒學を顯彰し、名教に功績があるのを愛するのであり、班固の見識ははるかに常人の及ぶうるものではない⁽²⁸⁾」という。錢大昕は、班固のこの表作成の意圖や構成などに問題が多いと歴代指彈されてきた點⁽²⁹⁾を十分承知していた。それにもかかわらず、そうした非難を棚上げして、この表が、儒學的理念を前面に押し出しているからこそ意味があるとした。この評價をもつて、史學を名教への貢獻度において價值づける契機としたのである。ここに錢大昕の史學は、儒學と一體化した史學であったことが読みとれ、それは、單に考據學的方法論の應用による實證史學の確立ではなく、「史學」の儒學化を究極的な目標としていた。さらに具體的には、この表が『論語』中の人物すべてを列舉するなど、『論語』への特別配慮があることから、後儒が『論語』を尊信する端緒を切り開いたとみる。そして班固の儒學的な見識をもつて、「古賢は、この

すぐれた見識を備えていたので、高くぬきんでて史學の宗となりえたのである⁽³⁰⁾と規定する。經學上の貢獻をもって、班固を「史家の宗」と評價したのである。さらに錢大昕は、この表ゆえに、班固の史學が經學と並ぶとまでいう。この點からもただちに理解できることは、錢大昕の史學における實事求是とは、歴史的出來事のなかに儒學的形而上學の「事實」を検證することであつた。

一方、『二十二史考異』では、顏師古が「漢書注」で、この表は今人に及んでいないので、完結していないとした見解を、批判する。この批判には儒學的理念の浸透の跡が顯著である。錢大昕は、「古今人表」と命名されていて、古人を九等に格づけしたことで、今人の鏡としての効果を發揮するのであるから、今人を表に掲げ格づける必要はなく、しかも班固の儒學理念が完全に表出している完結物であると主張する。表の意義を「貴賤は一時代に止まるも、賢否は萬世に現れるのであり、徳を失うものは身分が高くても必ず評價が下げられ、善を修めるものは身分が低くても、必ず高く評價されることを悟らせる⁽³¹⁾」ところにみる。またこの表を繼承するものがあつたとしても同じ理念を踏襲することについては、まさに「百世をへたとしても知ることができる（雖百世可知也）」と斷定する。すなわち、「孔子が百世をへたとしても知ることができる」といったが、要するに三綱五常を中心としていったのであり、王朝交替や制度の改變など、變化が單純でないものについては、聖人でもあらかじめ知ることはない⁽³²⁾ともいうように、錢大昕は歴史そのものが儒學的な普遍道德に貫通されたものと認識しており、時代ごとの個別的な事態、王朝交替・制度文物の變遷などの事柄は二義的とした。ここには普遍的な道義のみを本質的なものとする、非歴史的な觀念が見出されるのである。つまりかれの史學研究は經學研究の變形であつたというべきである。史學は、時代ごとの出來事・事件をもって、儒學の義理を検證することにおいて意義が認められているのであり、いわば『春秋』の再現であると見做しているといえよう。

あまりに自明なことは、考據學は、「儒學」としての清代における展開であった。したがって、それは當然のことながら、主観的な價值判斷に委ねるしかない、儒學的形而上學を內在させる。ところが考據學の特質とされる小學に基礎づけられた實證的な方法論は、自己言及的に儒學思想そのものを對象化することはありえず、ひたすら言語的存在としての經書のみを適用對象に限定して、まさに部分的な實證主義として展開した。このように考據學は表層にあっては、形而上學と實證的方法論という相容れないように思われる要素をかかえている。すなわち遠景としての儒學的形而上學と近景としての方法的合理性とを兩立させたかたちで存在したのが考據學であった。このため、その評價や史的位づけについて、これまで揺れがあったのである。その方法論の客観的な側面の波長が、いわば近代の實證主義と同調しうることから、考據學を「科學的」であると規定したり、杜維運のように短絡的に近代史學に連續するとみて、それらに共通すると見受けられる要素を数え上げる把握のしかたには、概念操作による陷穽があり、錢大昕の考據的史學の實像が隠されてしまうことになるのである。これらは方法論の客観的・實證的な近景にのみ目を奪われたものといわざるをえない。一方、范文瀾のように「考據學が用いたのは形式論理の方法であり、形而上學的な思维方法である」⁽³³⁾といい、形而上學であるとの指摘は肯綮に當たるものであるが、その形而上學が果たした意義を考據學それ自體に即して評價せず、辯證法のように歴史發展の法則性を追求する契機を內在させないとして切り捨てるのもまた正當な理解とは思われない。

では、形而上學と兩立した考據學の本質はいかに整合的に理解されるのであろうか。方法論の有效性は、それとその適用領域との一致が保證されることによる。したがって、それは、客観的な對象として檢證可能のものに適用を限定することとでその有効性を主張するのである。このため實證的態度は、價值と事實との區別をその適用の前提とすることになり、儒學的價值觀のような主観的判斷に屬する領域については適用對象として馴染まないものとして放置する。したがって事實領域で方法論上實證的であることと、價值領域で形而上學を內在させることは矛盾しないのである。それ以上に形而上學の存在によって、一定の世界觀が設定され、それによって所與としての現實世界が構成されるからこそ、そのなかで

實證主義が支えられることになるのである。

すでに見てきたごとく、錢大昕は儒學的價值を絶對化しており、その形而上學をもつて考據學の基盤をなす音韻論の領域も覆った。つまり、「易・書・詩・禮・春秋は、聖人が天地を治めたとのえる根據である。上は世の中を善くすることができ、つぎには人の身を修めることができて、道において通じないところはなく、義において備えないところはない」として絶對化された經書である『詩經』において、古聖賢の叡智として雙聲——聲紐が認識されることになった。ここに聲紐が儒學的意義を擔わされることになったのである。聲紐にたいするこうした儒學的な意味付與が可能となったことが大きな原動力となつて、錢大昕は、その聲紐理論の追求に積極的な姿勢をとることになった。これが、その古代漢語の聲紐に關する重要な原理の解明につながつたのである。さらに史學を經學に吸収し經學化することにより、まさに經學の文獻研究の手續きとして形成された小學を基礎とする考據を史學に適用するための合理的な下地を作つたのである。すなわち、儒學的な價值づけを得た聲紐原理を適用した史學文獻の考據は、單に言語の段階における實證的分析にとどまることなく、儒學論的な意味と通底したものとして研究されることになったのである。

要するに、小學にたいする儒學的意義づけがあつたからこそ考據が成立しえたのであつた。錢大昕の考據的史學の背後には形而上學が存しており、そのような形而上學に方向づけ支えられていたので積極的な考據のいとなみがありえたのであつた。したがつて形而上學を遮斷することなく、近景である考據學的實證史學とともに評價し、その儒學的形而上學が存在したからこそ實證的な研究が積極的に展開しえたという、清代考據學の本質を了解したうえで、その擴大した展開であつた錢大昕の史學研究の意義をも理解すべきであらう。すなわち考據學の實事求是の立場に即した實證的な研究について「たいへん窮屈な學問のやり方である。學問は證據で推しすすめてゆくだけでは、必ずどこかで壁にぶつかる」という危惧も指摘されるが、考據學の本質は實證的方法論のみで完結し、證據のみに依據する事實主義に自縛されていたわけではなかつた。しかも、錢大昕の史學の考據は、つねに儒學としての枠組みのなかにあつたから、一方では考據學の系譜

のなかで、宋明儒學を克服する學派的な戰略としての實證的方法論の精密化があり、他方では、史書におけるいかなる事柄での「是」の解明もすべてが儒學的な意義を負う、まさに儒學としての價值づけがあった。こうしたことから心配されたごとくには窮屈な學問とはならず、文獻上の正確さを徹底的に、積極的に追求することになったのである。そしてまた、ここに經・史を分離する王鳴盛や趙翼らの史學的考據のとりえかたとの分歧があったのである。

以上、錢大昕の考據學としての史學のあり方についてみてきたが、その儒學的側面を重視しすぎたきらいがあるかもしれない。しかしこれは、從來の研究が、清代考據學の脈絡のなかから、錢大昕の「史學」部分をすくい取って分析する傾向にあったことにたいして、それをもととの脈絡のなかで明らかにしようとしたところみたらにほかならない。たとえば、P・ロッシは、啓蒙主義者による偏頗な歴史記述から、ナンセンスなものとして脱落させられていた、ブロック文化における人工記憶と結合論理學の技法の、まさに「實證」的な研究において、そのみずからの手に餘る對象の不當な扱いをつぎのようにいう。「これらの技法がなお生きて生彩をはなっていた時代のあるべき史的脈絡から、その議論や理論をむりやり引っこ抜いてしまってもなおその論争、議論、理論の意味を理解できると思いこんでいる歴史家が今も昔も多い」と。(36)つまり、無自覺のまま、自分の側の事情に合わせて對象を扱いやすく恣意的に切り取って研究する姿勢をなげいたのである。これは錢大昕の史學あるいは清代考據學研究の、形而上學的側面を捨象し、その實證的側面でのみ理解してゆくこととするあり方にも通じそうである。そして、これはまたP・A・コーエンの問題提起にも通底するもののごく思われる。すなわち歐米での中國研究における西洋中心的性格、つまり中國の歴史の自律性を認めようとしない姿勢の存在を明確に指摘したうえで、「中國自身に即した」アプローチを提唱する。これはやや歴史主義に抵觸するところもありそうだが、取りもなおさず、自分の側の認識の立場が對象をあらかじめ限定してしまうことを自覺し、對象自體の脈絡にしたがって研究することへの要請なのである。

註

- (1) 『清代史學與史家』「清乾嘉時代之歷史考據學」中華書局、北京版一九八八影印、二九〇頁。
- (2) 『無邪堂答問』卷二、世界書局、民五二、三三三丁。
- (3) 『飲冰室專集』(六)、『清代學術概論』臺灣中華書局、民六二、三九一四〇頁。
- (4) 柴德廣『史學叢考』「王西莊與錢竹汀」中華書局、一九八二、二六五頁。これは梁啟超の指摘をうけるもので、周谷城も『周谷城史學論文選集』「中國史學史提綱」人民出版社、三二六頁で觸れており、杜維運も『清代史家與史學』三〇五頁以降に詳しく論じている。
- (5) 四部叢刊『潛研堂文集』卷二四、「左氏傳古注輯存序」商務印書館、二一七頁。
- (6) 同右書卷二四、「臧玉林經義雜識序」、二一九頁。次の二二〇頁「經籍纂詁序」にも、有文字而後有詁訓、有詁訓而後有義理、詁訓者義理之所由出。非別有義理、出乎詁訓之外者也、とある。
- (7) 同右書卷二四、「經籍纂詁序」に、自晉代尙空虛、宋賢喜頓悟、笑問學爲支離、棄注疏爲糟粕、談經之家、師心自用……其貽害於聖經甚矣。我國家崇尚實學、儒教振興、一洗明季空疎之陋、という。宋・明學の本質がこのように規定されたものであるかは検討を要するが、錢大昕、延いては清代考證學者らに抱かれている典型的な形象である。
- (8) 經學研究において吳派の惠棟は「古」を求め、皖派の戴震は「是」を求めたという評價が定着しているが、これはそうした吳派・皖派という學派的枠組みを踏み越えるものである。『經義雜記』評校語に王顯曾は「昔戴吉士云、惠氏求其古、東原求其是。然所謂是者、仍東原之所見也。先生此書、則求是於古矣」といい、戴震の「是」はその主觀にかかわるが、臧琳については錢大昕の立場と共通する「求是於古」と位置づけている。
- (9) 『潛研堂文集』卷二四、「左氏傳古注輯存序」、二一七頁。
- (10) 同右書卷二四、「小學攷序」、二二一頁。また卷一五、答問二、一三六頁にも、古人因文字而定聲音、因聲音而得詁訓。其理一以貫之、とある。
- (11) 同右書卷二四、「詩經韻譜序」、二一六頁。
- (12) 湯志鈞校點『戴震集』「書玉篇卷末聲論反紐圖後」上海古籍出版社、一九八〇、一〇三—一四頁。
- (13) 倉石武四郎「戴震と錢大昕」、『東京支那學報』一、一九五五、(のち『倉石武四郎著作集』第二卷、くろしお出版、一九八一に收載)では、戴震が、「轉語二十五章序」にその理論の片鱗を残すのみで、ついに完成することができなかった聲紐を樞機として音聲と意味とを總合した訓詁理論の構想を、錢大昕が採用してみずからの古典文獻研究の言語學的な基點としたことを清代考據學における「限界」とみる。その論點は、いわゆる言語學的な立場のものであり、錢大昕の言語理論に抜きがたく附隨する儒學理念を捨象した見解となつていよう。
- (14) 『潛研堂文集』卷二四、「詩經韻譜序」、二一六頁。

- (15) 『十駕齋養新錄』卷五、「字母」、廣文書局、民五七、二六二頁。
- (16) 『潛研堂文集』卷一五、答問二、一四〇—一頁。
- (17) 『龍蟲並雕齋文集』第三册、「略論清儒的語言研究」、中華書局、一九八二、三五七頁。
- (18) 『二十二史考異』卷三、「史記律書」、中文出版社、一九七六、三六頁。
- (19) 『潛研堂文集』卷六、答問三、五八頁。
- (20) 『十駕齋養新錄』卷五、「字母」で、聲紐の發音方法に、出・收・送の三等があることをいう。これについては羅常培『漢語音韻學導論』に詳しい。
- (21) 東洋學叢書『東洋思想研究』創文社、一九八七、五三二・五四八頁。
- (22) 『方植之全集』、『攷槃集文錄』卷五、「書錢辛楣養新錄後」。
- (23) 『國朝漢學師承記』卷三、中華書局、一九八三、四九頁。
- (24) 『潛研堂文集』卷二五、「盧氏群書拾補序」二三五頁。
- (25) E・H・カー、岩波新書『歴史とは何か』岩波書店、二五頁は、歴史が歴史家の現代の關心にもとづいて書かれるという議論のなかで、カール・ベッカーの語「歴史上の事實というものは、歴史家がこれを創造するまでは、どの歴史家にとっても存在するものではない」を引用する。史料のなかに歴史的な事實は存在し、それを實證的に明らかにしてゆけば、おのずから歴史の意義が現れるという素朴實證主義の認識とは逆轉した歴史認識のしかたである。こうした認識は社會科學

におけるだけでなく、近年自然科學の領域でも論じられる。G・パシュール『新しい科學的精神』中央公論社、一五八頁には「平行線は、ユークリッドの公理のあとではじめて存在するのであって、それ以前には存在しない。……優先するのは、いつも同じ方法論的定義である」と、方法論による論理操作が對象を規定することをいう。

- (26) 『十駕齋養新錄』卷一三、「唐書直筆新例」六八四頁。
- (27) 奇異なことに錢大昕はみずからの文集に採用しない。これについては柴德賡「王西莊與錢竹汀」二六三頁に、史學を経學に並べることは、當時にあっては激越であった、このようでも考えなければ解釋がつかない、とする。
- (28) 『潛研堂文集』卷二八、「跋漢書古今人表」、二六七頁。
- (29) 『叢書集成新編』第一一〇册、梁玉繩『漢書人表考』序、新文豐出版公司、四七〇頁では、劉知幾『史通』以下、歴代の批判を概観している。
- (30) 「古今人表」についての錢大昕の思い入れは、梁玉繩にも多大の影響を与え、『漢書人表考』の著述となった。その序文には錢大昕「跋漢書古今人表」の文が、ほぼそっくり錢大昕からの聞き取りとして記録される。そこでは「古賢」が「孟堅（班固）」となっている。
- (31) 『二十二史考異』卷六、「古今人表」、一二二頁。
- (32) 『潛研堂文集』卷三六、「與邱帥心書」、三四九頁。
- (33) 『范文瀾歷史論文選集』、「看看胡適的、歷史的態度、和科學的方法」、中國社會科學出版社、一九七九、二四四—五頁。

(34) 『潜研堂文集』卷二一、「抱經樓記」、一九六頁。

(35) 宮崎市定『東洋の歴史』第九卷、「清帝國の繁榮」、人物
往來社、一九六七、二二二頁。

(36) 『普通の鍵』國書刊行會、一九八四、一三頁。

(37) 『知の帝國主義―オリエンタリズムと中國像―』平凡社、
一九八八。

QIAN DAXIN'S 錢大昕 STUDY OF HISTORY AS TEXTUAL RESEARCH

HAMAGUCHI Fujio

It is commonly believed that Qian Daxin applied the method of textual research used in Confucianism to the study of history. Accordingly, the main thrust of this paper will be to clarify the nature of Qian Daxin's historical studies in the context of its relationship with the Qing 清 period's textual approach, developed as a means to expound the Confucian Classics.

It is my opinion that, firstly, in his commentaries on the Confucian Classics, Qian Daxin gave due regard to the meaning assigned to words in the Han period. At the same time his was a typical interpretation, resulting from a positive approach based on the phonetic analysis of Ancient Chinese used.

An attempt will be made to prove the above and also to verify that Confucian values played a role in his commentaries. Furthermore, it will be confirmed that Qian Daxin thought of the study of Confucian Classics and history as being one and the same. Accordingly, Qian Daxin's research of history, which was said to be objective and positive in nature, was indivisible from the study of Confucianism. This background of Confucian metaphysics supported his positivism and also made possible subsequent active development. The above was considered within the context of textual research in the Qing period.